

『自然の社会化』『自然のシンボル化』に関する史的唯物論の観点からの再考

永谷 敏之（高崎高等看護学校非常勤講師）

人間の問題を考えると、われわれは人間を取り巻く環境(自然、社会を問わず)を無視することはできない。そして、環境なしに人間(存在)を設定することはできない(同時に、人間なしの環境を想定することも——自然環境における一部の例外を除けば——有効ではないだろう)。人間は環境に規定され、制約すると同時に、環境を「作り上げる」。だが、人間と環境の関係には矛盾が横たわっている。この、人間が作り上げた環境と人間の間での矛盾の顕著な例として、自然環境問題があり、社会問題がある。そして、それらをいかに認識するのかということもまた重要な問題となるだろう。本論では、フランクフルト学派第3世代に属するクラウス・エーダーの『自然の社会化』(寿福真美訳・法政大学出版局)における自然と人間の認識について若干の考察を行う。

まず、エーダーが消費に注目し、人間による自然の取得の中に、シンボルという観点を提起したことに意義がある。この「自然の取得」に食のタブーや肉食文化・菜食文化のモデルの対照を通じて対自然関係や「エコロジー的合理性」を明らかにしようとする点は特に重要である。とはいえ、そこに人間が主体であると同時に客体であるという観点がやや背景に押しやられていることは否めないのではないかと考えられる。人間がどのように自然をとらえ、認識し、「シンボル化」してきたのか、そしてそれらが食のタブーや宗教的儀礼を通じて道徳的意識が形成されることも論じられてはいる。しかし、自然は人間(または社会)に対しては体的存在である(この場合、人間は客体となる)ということとは不十分なように思われる。

また、史的唯物論とのかかわりで論じることも必要になる。エーダー自身、史的唯物論をある程度意識しながら、はじめの章を書いている。とはいえ、エーダーの史的唯物論評価はそれほど高いものではない。そのことは史的唯物論を「客観主義」「規範主義」としてとらえ、「消費としての〔自然〕獲得過程における文化への自然の変形がそれ(引用者注——交換価値とは異なる使用価値の論理)である。(中略)このような見方は史的唯物論には閉ざされている。使用価値は人間学的に所与のものとして、つまり自然的欲求のシステムとして定義されているからであり、マルクスが使用価値は政治経済学の外部にあると主張するとき、それは首尾一貫しているからである。」と述べている点に顕著に見られる。

われわれの意識には歴史的・場所的なものが刻まれている。「自然と人間」というとき、ここには無意識的に「〇〇人の世界観」から対象を認知し、それを言語化したり、生活の活動に反映させたりしている。こうした視点からエーダーを批判的にとらえ返すことが必要になるであろう。